

Title	モモシキとモモシギ
Author(s)	山田, 昇平
Citation	詞林. 64 P.1-P.15
Issue Date	2018-10-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/70607">https://doi.org/10.18910/70607</a>
DOI	10.18910/70607
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# モモシキとモモシギ

○. はじめに

古い時代と現代の語彙を比べると、清濁を異にするものがある。これは古くは本居宣長や石塚龍麿といった国学者らの指摘するところであるが、近代以降の研究でも、岩淵悦太郎（一九三六）などで総合的に示される。

これを個別に扱った考察には、例えば、亀井孝（一九七四）がある。同論では、ソソクとソソグの両形について、両者が永らく併存関係にあったであろうこと、前者から後者が生じたと推定されること、その変化は「ススグ」に牽引されたものであろうこと、を示す。

このような変化は基本的には個別的なものである。しかし、同論でこれをもとにその背景にある清濁の変化傾向や意味を説くように、個別的な事例をもとに、清濁の変化やゆれの諸相を示すことで、日本語における清濁全体の問題を捉える手がかりとなる。

一. 問題設定

その一つとして、ここでは「ももしき」(百敷・百磯城など)を扱う。この語は、古くは「ももしきの」の形で「大宮」を導く枕詞であったが、後にそれだけで内裏や宮中そのものをあらわす語として用いられる。現代においては、各翻刻資料やその注釈、あるいは慣用をみるに、その語形は清音の形で広く認識されているといつてよい。

しかし、中世期には、濁音の形も存在していたらしい。『時代別国語大辞典 室町時代編』には次のようにある。

(一) ももしぎ「百敷」「ももしき」「ももしき」とも。

内裏、宮中、をいう雅語(以下略)

『時代別国語大辞典 室町時代編』

ここでは「ももしぎ」や「ももしき」といった濁音形の存在が示されている。特に、「ももしぎ」は見出し語にあり、『日本国語大辞典』第二版や『角川古語大辞典』でも中世期の特

山田 昇平

徴として言及される。『時代別室町』が見出しに採用するのは、特に、キリシタン版『日葡辞書』にみえることが大きい。

- (2) Momoxigu. P. Dairi. Paços del Rey, ou sala onde se ajuntão cem dignidades.

『日葡辞書』一六五丁表(一六〇四年成立、訳：詩歌語。内裏。国王の宮殿、すなわち百人の貴人が集う広間)

- (3) Momoxigu. Fiacuxiqu. i. Dairi. Paços del Rey. P.

同補遺 三六三丁裏(一六〇五年成立、訳：百敷く。すなわち内裏。国王の宮殿。詩歌語)

ここでは詩歌に関わる語であることをあらわす P. (Poesia の略) の注記とともに「ももしぎ」 Momoxigi の形を載せる。同書は日本語をローマ字で写したものであり、かつ本編と補遺のいずれもこの形をとるから、「ももしぎ」の存在は疑いようがなく、当該時期に広く行われたことが窺える。このような例から、「ももしぎ」はその濁音形と併存していた時期が存在したらしい。このような事例はある語の清濁のゆれや変化の一例といえよう。

もっとも、「ももしぎ」は、上代から現代にかけて、特に和歌を中心に用いられる特殊な位相の語である。そのような語は人為的な影響を受けやすく、日常語を中心に扱う言語史研究の対象とはし難い。しかし、ここではむしろ、そのようなこの語に対する使用者(や、使用される社会)における意

識に注目したい。このような観点からの考察により、人々が清濁をどのようなものとして捉え、扱ったのか、という清濁に対する意識の歴史を描くことが期待される。

本稿では、このような問題意識のもと、「ももしぎ」の清濁の歴史について、特に「ももしぎ」について、その発生・展開・消失といった点に注目し、その大筋を素描する(「ももしぎ」については、十分な用例が確認できず、ここでは扱わない)。

なお、以下では、語形を明確に示すときには「モモシキ」「モモシギ」といったカタカナ表記を、清濁に関わらずこの語を示すときには「ももしぎ」のひらがな表記をそれぞれ用いる。

## 二. 「モモシギ」の発生

「モモシギ」がいつ発生したかは、具体的には明らかにしえない。上代文献の例については、『時代別国語辞典 上代編』などで「モモシキ」としており、上代についてはひとまずこれに従う。それ以降の確実な例ということになれば、声点付の古今和歌集注の類(古今集声点本)に早い例がある。古今集声点本の総合的な研究である秋永一枝(一九七二、一九七四、一九八〇、一九九二)にもとづけば、現段階で最も早く、確実な例は、度会延明『古今訓点抄』にある(以降の引用では、原本からの引用であるものは、句読点を私に補う。翻刻

のあるものはそれに従う。なお、注や声点等については、書き方を改めた所がある。振り仮名については必要な箇所を「」で示した。傍線は断りのない限り山田による。

(4) モ<sup>(平)</sup>モ<sup>(平)</sup>シ<sup>(上)</sup>キ<sup>(平濁)</sup>ヲ 身ヲハ<sup>(平)</sup>ヤ<sup>(平)</sup>ナ<sup>(上)</sup>  
カ<sup>(上濁)</sup>ヲ<sup>(上)</sup>

『古今調点抄』(嘉元三(一三〇五)年成立)

ここでは古今集一〇〇〇番歌の「ももしき」に、濁声点を差す。本書は度会延明の受けた古今集に関する伝授を反映したものとされるが、詳しい内実については不明である。少なくとも「モモシギ」の形が中世中期ごろにすでに行われていたことはわかる。

また、ごく近い時代に成立した京大本『古今秘註抄』にも「モモシギ」への言及がある(■は虫損。「」で囲んだ箇所は文字数不明)。

(5) 百官の「■」<sup>(平)</sup>、むるによりて百敷と申也又百■<sup>(平)</sup>とかきて、も、し<sup>(平)</sup>き<sup>(平濁)</sup>とよみて義を申たれとも 相伝にあらす

京都大学中院文庫蔵『古今秘註抄』(元応二(一三二〇)年成立。南北朝時代写)

ここでは、濁音形「モモシギ」の存在を認めつつも、「相伝にあらす」とする。当該時期においてはすでに「モモシキ」と「モモシギ」とが並存しており、両者の選択が伝授の内容と結びついていたことが窺える。ただし、本書は、奥書から

上観なる人物から■<sup>(上)</sup>恵への伝授とされ、秋永一枝(一九九一・四八六)は「禅籍にあるものへの伝授ではあるまいか」とするが、これも詳しくは不明である。

特に(4)を資料としつつ、「モモシギ」の発生理由を説明したものに、遠藤邦基(一九八二・二九四)がある。同論は、「ももしき」のアクセント表示の異なりを扱った秋永(一九八〇・一九一)が、その異なりを当時の「語源説」の差(「しき」を「敷き」とするか、「磯・城」あるいは「石・木」とるか)と説明するのを受け、その方法を清濁にも適応し、次のように述べる(引用中の( )は山田による)。

〔磯・城〕説、「石・木」説の( ) いずれの語源説をとっても、この場合モモシキ<sup>(平)</sup>であって、現象的には連濁の範疇に入る。おそらく語源とのかかわりでこの形態(「ももしき」)はうまれたのであろう

即ち、「シキ」を、「シ」「キ」の複合ととるならば、後部の「キ」が連濁し、「モモシギ」の形が生じうる。「モモシギ」の形を、「ももしき」に対する当時の語源意識(語構成意識)を反映して生じた形と推定するのである。

この推定に対して、(5)に「百■<sup>(平)</sup>とかきて、も、しき<sup>(平)</sup>とよみて義を申たれとも」とあるのが呼応する。(5)は虫損による不明箇所が多いものの、その趣旨は、「モモシキ」説を取りながらも、「モモシギ」説に触れ、それらの読みの根拠を示したものと見えるだろう。

「百官の[■]、むるによりて百敷と申也」とあるのは、「モモシキ」の「シキ」を「敷き」と捉える語源説を示したものだろう。不鮮明箇所は、「百官の座を敷くから百敷」といった後の時代にも多くあらわれる語源説(後述)に相当すると推定される。

そして、ここで「相伝にあらす」として対置される記述「百敷」とかきて、も、しき(平濁)とよみて義を申」では、虫損箇所が存在した表記を根拠に「モモシギ」を選択する説に触れる。この箇所は二字存在したとみえ、そうであるならば、これは秋永論文や遠藤論文で示される、「磯城」乃至「石木」のような形ではないか。いずれにしても、この箇所は「ももししき」と分析しうる表記であったと推定するのが自然であろう。よって、本稿では実際に「モモシギ」と「ももししき」の語構成意識を結びつける理解が存在したと判断する。以上から、「モモシギ」の具体的な発生時期などは不明であるものの、この語形が「ももしき」の語源・語構成意識との関係において生じたものと考ええる。

ちなみに、「ももしき」は「百敷」と表記され「百官の座を敷くため」といった語源説もある。しかし、澤瀉久孝(一九五七)や吉海直人(二〇〇一)で指摘されるように、これは本来的な語源とはいえない。上代における「ももしき」の「キ」は、いわゆる上代特殊仮名遣いでは乙類に分類される。対して「敷く」の連用形「敷き」は甲類の「キ」であるはず

で、甲乙を異にする。故に両者は上代において別形といえ、語源的なつながりはない。「百敷」の表記は後の時代に当てられたもので、新しく生じた語源・語構成意識によるものだろう。

### 三、「モモシギ」の展開

先に『日葡辞書』をみたように、中世後期には「モモシギ」の形が広く行われたらしい。歌学資料においては次のようなものがある。

(6) 百敷「も、しき」やふるき軒はのしのふにも猶なほあり  
 まりあるむかしなりけり

百敷ももしきトハ禁中ヲ云(以下略)

広島大学蔵『百人一首経厚抄』(享祿三(一五三〇)成立、伝経厚自筆)

『百人一首経厚抄』のうち、ここに挙げた広島大学蔵本(大本)は、全編に渡って振り仮名が付されており、ここでは「モモシギ」を用いる。もつとも、広大本は経厚自筆とされるが、疑問が呈される他、振り仮名については後の手になるものと考えられるなど、「モモシギ」が選択された時代や背景は未詳の点が多い。ともかくも、「モモシギ」を選択することがあったらしいことはわかる。

また、次のように「モモシキ」を選択するものもある。

(7) 山川の音にのみ聞 ももし(不濁)き(不濁)

『古今私秘笈』(永正五(二五〇八)年成立。天文四(一五三五)年写)

ここでは、「し」き」にそれぞれ不濁点を差し、「モモシキ」であることを積極的に示す。このような処置を裏返せば、当時において「モモシギ」(あるいは「モモジキ」)は無視できない形であったということだろう。中世後期の歌学の場合において、「もしき」の清濁はしばしば問題になったことが窺える。

ところで、先に「モモシギ」の形は、「ももししき」といった語構成意識のもと生じたとした。しかし、(6)において、「モモシギ」の読みが、いずれも「百敷」の表記に振られている点には注意が必要であろう。この「百敷」は、本来的には「ギ」と濁り得ない「ももししき」の語構成意識に通じる。このような認識は中世後期資料をみる限り珍しいものではなく、例えば辞書類に多く確認される(振り仮名のうち、必要な箇所は「」で示す。以下同じ)。

(8) 百敷「モ、シギ」百官

正宗文庫本『節用集』毛部天地門六〇丁表  
(9) 百敷「モモシギ/左ハクフ」百官の座敷也  
故云——ト

文明本『節用集』毛部家屋門(文明年間成立)  
(10) 百敷「モ、シギ」百官/座席<sub>シキ</sub>也故云——ト也  
元和三年版『下学集』卷上天地門七丁表

(11) 百敷「モ、シギ」ト云ハ。何ナル謂レソ。是モ只。内裏ノ名也。百官ノ座敷ナル故ニ。尔曰<sub>云</sub>。

刊本『鑑囊鈔』卷四三丁表一裏(文安二(一四四五)年成立、正保三(一六四六)年版)

(9)と(10)の注文は引用関係にあると考えられるが、ここでは「百官/座席<sub>シキ</sub>也故云——ト也」といった語源説を採りつつ、「モ、シギ」の読みを採用する態度が流布している点に注目したい。この語を「百官の座を敷くため」と解釈しながら、「モモシギ」をとるものは、このほかにも多く、(2)(3)に示したキリシタン版『日葡辞書』も同様であった。

このような、語形と語源説・語構成意識との不一致については、遠藤(一九八二・二九五)で、「百敷の場合に限ってモモシギと訓まれたのは、やはり一種の「読癖」というべきであろう」とする指摘に従う。「もしき」のような雅語であれば、語形の発生や採用の段階においてはともかく、受容過程において、語形と漢字表記(語源説・意識)に齟齬が生じたとしても、そのような読み癖として許容されるということとは十分に考えられる。当該時期の「モモシギ」は、本来的な語源意識と切り離された読み癖として展開したとみるべきだろう。

もっとも、その具体的な展開の様子には、分からない点も多い。古今集注や百人一首注である、先の(6)(7)などは、

いずれかを選択する態度をとる。一方で、次のような記述もある。

(12) 百敷やふるき軒端の忍ぶにも猶あまりある昔成けりしき(右：不濁点 左上：濁声点)

注・清濁両説。何も同前也。

京都大学中院文庫蔵「百人一首聞書」(永祿三(一五六〇)年以前成立。近世極初期書写)

(12) は三条西家流の百人一首注釈書である。百人一首に對する公条の注釈を聞きとめ、そこに実枝の注説を頭注や付箋の形で書き加えたものとされる(赤瀬知子(一九九五・十七))。ここでは「き」に対して、不濁点・濁声点が共に差され、さらに注では清濁について「何も同前也」とする。三条西家としては、「ももしき」の清濁について定まった方針が存在しなかつたらしく、後水尾院による『詠歌大概聞書』には次のような記述もある。

(13) も、しきのきの字遣遙院ハ濁、称名院ハ清ト云。

惣シテ遣遙院ハ濁カチナリ。称名院ハ清タルコト多シト也

宮内庁書陵部蔵 後水尾院『詠歌大概聞書』

実隆(遣遙院)は「モモシギ」を、公条(称名院)は「モモシキ」をそれぞれ用いていたとする。ここでは清濁の使い分けについては、個人の慣わしに帰せられているようにみえる。(12)の注を付したのが実枝であるならば、(13)のよう

な実態を踏まえたものということだろうか。

このような態度は三条西家に独自のものとみることもでき、「ももしき」に限らず読み癖全体を捉える必要がある。この点については本稿では判断できず、今後の課題としたい。しかし、このような例からは、「ももしき」も含め、「読み癖」がどのような態度で用いられたか、その諸相の複雑さが窺えよう。

#### 四、「モモシギ」の行方

##### 四一 二条家流と「ももしき」

実枝は「清濁両説。何も同前也」と記したのであったが、その実枝から古今伝授を受けたとされる細川幽齋は『耳底記』(『詠歌大概文字よみ』に関する項目)の述者として、次のように述べる。

(14) 百しきの大宮人はいとまあれや櫻かざしてけふも暮しつ 此のきの字清むべし。(私云當流は主旨すんでよむとみえたり。)

『耳底記』慶長三年八月十三日口授(慶長三二七(一五九八—一六〇二)年成立)

ここでは、「モモシキ」を採用する旨を述べており、清音に決定する態度をとる。また、聞書者の烏丸光広は私説として「當流は主旨すんでよむとみえたり」とする。これは、「も

もしき」に限らないとする旨であろうが、「當流は」とあるように流派としての方針が窺える。当然、幽齋の歌学に関する知識が実枝の伝授のみというわけではないだろうから、どのような経緯でこのような方針としたかは分からない。しかし、二条家流歌学の伝流としては、「モモシキ」とするといふ方針が明確になったようで、二条家流を受けた地下流の資料では、積極的に「モモシキ」を示すことが多い。地下流歌人平間長雅の奥書のある『百人一首講談密註』を示す。

(15) 百敷 (左上・不濁点、左下・不濁点) やふるき軒場のしぬふにも

猶あまりあるむかしなりけり

頭注・一 百敷やすみてよむ。百は無窮にして万代不易の心也。百官百寮座をしくゆへ也(以下略)

『百人一首講談密註』(近世前期写)

また、その弟子にあたる有賀長伯の述を書き留めた『以敬齋聞書』には次のような見解が述べられる(本書のみ濁点を補った)。

(16) ももしきの清濁の事

も、しきのき文字すみてとなふべし。濁るべからずと也。

私曰此も、しきのき文字世の人おしわたりても、しぎと濁れり。それはわろし。清てとなふべしと也。されば耳底記に

百敷の大宮人はいとまあれやさくらかさして

けふもくらしつ

此きの字清べしとありて、又細書に當流には大方すむてよむと見へたりとあり。近世の季吟なども述作の抄物に百しきのき文字にわざ／＼すみ点をつけたるあり。是も世の人なべて濁る故になり。

むべなる事也。季吟法印は先師明心居士の弟子にて先師長孝と相弟子にて當流同門の人也。此百敷といふは内裏をいふ也。百敷の大宮と続けたる也。内裏には百官の座を敷ゆへに百敷といふ。百の座をしく事なり。然は敷のき文字濁りてとなふべきゆへはさら／＼なきこと也。た、何となく世上の人の濁りつきたるなるべし。誤り也。清てとなふべし。當流の教也。

長伯の述は「も、しきのき文字すみてとなふべし。濁るべからずと也」とする。これを受けて、聞書者の私説では、「も、しきのき文字世の人おしわたりても、しぎと濁れり」とし、「モモシギ」が広く通用しているとする認識を示しつつ、それに対して、先の『耳底記』の記述や、季吟の「述作の抄物」をあげるなど、二条家流の伝統であることを強調しながら「モモシキ」をとることを主張する。

このような「ももしき」の清濁に対する態度は、先の三条西家におけるものとは異なる。つまり、「モモシキ」の選択



と流派意識とが明確に連続しており、地下流としての「ももしき」に対する明確な方針が窺えよう。

また、中世後期には「百官の座を敷く」式の語源意識を持ちつつ「モモシギ」の語形をとることが少なくなかったのに対し、(16)では「百の座をしく事なり。然は敷のき文字濁りてとなふへきゆへはさら／＼なきこと也」とする点も注目されよう。ここでは、このような語源説を根拠に、それと一致しない「モモシギ」を積極的に否定する。このような態度は、中世後期において、広く行われていた読み癖の矛盾を突くもので、(批判を目的とするという点で注意が必要であるが)それまでとはやや異なるものみにみえる。

#### 四. 二 近世の「モモシギ」

もつとも、(16)に「世の人おしわたりても、しぎと濁れり」とあるように、近世期においても「モモシギ」は行われていた。

例えば、時代が下っても、清濁(スム・ニゴル)による分類方法を採用する近世節用集、再版『大成正字通』では、「ももしき」を「ニゴル」に分類している。

(17) 百敷「も、しぎ」／百寮「ハクレウ」

再版『大成正字通』も部国地家門ニゴル(享和二(一八〇二)年版)

歌学においても、二条家流から離れた所では、「モモシギ」

が選択されたらしい。近世に行われた百人一首注の類から、次の二点をあげる(書き込みは適宜関係するもののみを示す)。

(18) 百敷やふるき軒端の忍ふにも猶あまりあるむかし  
成けり

も、しき冷泉家には濁る也。二条家清也。百官座をしく故に禁中を百舖マヤと言。(以下略)

(19) 百しき(左・スム)やふるき軒端の忍ふにも猶あ  
まりあるむかしなりけり

新後撰集雑下。題しらすマヤ云。

早苗草云。(中略)百しきはしぎの都をさしていへり。大和国城上郡有なり。百官の座をしく所と見るは悪し。ぎと濁るにて知るへし。(以下略)

(18) においては、二条家が「モモシギ」、冷泉家が「モモシギ」とする流派による差を指摘する。

また、(19)の『龍吟明訣抄』は「谷澤而立が師(多田義俊)の講述を輯録したもので、「義俊が若き頃京家に仕えて得た堂上の注に、諸抄を加えてまとめ」た、というものである。ここでは「スム」とする書き込みの一方で、「しき」を「しきの宮」(磯城宮)と解釈し、それに応じて「モモシギ」と濁る旨を引用する。「スム」の書き込みと「モモシギ」とする引用は相反するものであるが、このような記述の非対応

は同書には珍しくなく、注や諸抄が並列されているということだろう。

「モモシギ」とその根拠となる語源説は、その内容のみをみれば中世前期の(5)に近い。ただし、契沖『万葉代匠記』の精選本(元禄三(一六九〇)年成立)に、「ももしき」の語源説を磯城瑞籬宮とする説がみえる。同書では「モモシキ」とついているから、直接的な引用関係とまでは言えないが、(19)の背景には保留が必要だろう。とはいえ、「モモシギ」の根拠となる語源説を示す記述が存在したことは注目される。

この記述の典拠とされる『早苗草』については、序文中で中院通茂(一六三一—一七一〇)の撰とされる外は分らないものの、堂上歌人の手になるものであるから、このような理解が堂上においてなされていたことが窺えよう。

一方で、(16)で「モモシギ」が濁る理由を、「た、何となく世上の人の濁りつきたるなるべし」とする認識が示されるように、(19)のような理解は「百官の座を敷く」より広く知られるものではなかっただろう。むしろ、当時において「百官の座を敷くからモモシキ」という理解の方が、一定の説得力をもったのではないだろうか。

#### 四. 三 「モモシキ」の優勢

このような状況から、近世期には「モモシキ」が優勢であったと考える。それを示す一例として、近世初期から出版され

た絵入百人一首注釈書のひとつである『百人一首像讚抄』をみてみよう。同書は『百人一首基箭抄』とともに一般向け書物として広く流布し、「啓蒙の役割を最大に果たしたもの」(田中宗作(一九六六・二一五))である。同書は現在確認できる範囲で、四度版を重ねているが、もともと古い延宝六(一六七八)年刊本では順徳院歌の読みに、次のように「モモシギ」の形を用いる。

(20) 百敷(ももしぎ) やふるきのきばの思ふにもなをあまりあるむかしなりけり

これが、次の天和三(一六八三)年刊本では振り仮名が付されなくなり

(21) 百敷やふるきのきばの思ふにもなをあまりあるむかしなりけり

と、なるのだが、続く元禄五(一六九二)年刊本では

(22) 百敷(も、しき) やふるきのきばの思ふにもなをあまりあるむかしなりけり

のように、「モモシキ」の形をとり、後の版でも同様である。同書は元禄五年刊本から、奥書に次の文言が加えられる。

(23) 右此本前方校合本ヲ以板行出候与有之寂是ヲ披見するに注釈ニ誤有之不成調法今改之清濁仮名遣迄令吟味板行する物也。

元禄五歳<sup>甲</sup>初秋吉旦

朋林軒開板

傍線部について、実際に清濁はほぼ網羅的に示されているといつてよく、版を重ねる過程で「モモシギ」が「モモシキ」へ訂されたと考えてよいだろう。同書の改版にあたり、何が参照されたかは別に明らかにする必要があるが、このような事例からは、中世期には珍しくない形であった濁音形「モモシギ」が否定され、「モモシキ」へと淘汰される過程が窺えよう。

近世期には、二条家流(地下流)では清音形「モモシキ」を探る方針が確立される。濁音形「モモシギ」は一部の資料や他流派で行われていたのが確認できるが、一般向け書物など広く受け入れられるようになったのは「モモシキ」であった。<sup>15</sup>このような過程で「モモシギ」は次第に失われていったものと思われる。

## 五. まとめ

以上、特に「モモシギ」に関して、便宜的に発生・展開・消失の三段階を想定し、次のように素描した。

発生: 「ももしき」の語構成を「モモシキ」と分析する意識のもと「モモシギ」が生じた。具体的な発生時期は不明である。

展開: 中世後期には、「モモシキ」「モモシギ」の両形とも広く確認できる。ただし、「モモシギ」は「百敷」

の表記であっても用いられるなど、発生のもととなった語源・語構成とは結びつきのない、読み癖として行われる。

消失: 二条家流(地下流)歌学で、「モモシギ」が否定される。一般向け書物でも「モモシキ」が採用されるなど、近世期を通して、「モモシギ」が広く行われなくなる。

この語の清濁において特徴的なのは、語源・語構成に対する意識との関係に変化が生じる点であろう。

「モモシギ」の発生は、当時存在した語源・語構成意識に応じた連濁形であって、「ギ」が濁音化する理由として自然である。しかし、中世後期資料にあらわれる、「モモシギ」には、その意識が失われている。ここでは「モモ(百)シギ(敷)」といった語構成意識で捉えられており、清濁と語構成とが対応しないまま展開していた。

本稿では、このような展開の直接的な理由を、慣習的な読み癖として説明づけた。遠藤邦基(二〇〇〇:二三)では、類似の事例をもとに、読み癖の選択が「その知識を持っていることがステータスとして権威と結びつくことになったのである」とする。これに従えば、当該時期において「モモシギ」が展開したのは、「モモシキ」の対の選択肢となる特殊な知識として地位が与えられたためということになるだろう。そ

の場合、同時代的な語構成意識と結びつかない点も、むしろ特殊性を持った知識として受け入れられたのかもしれない。

もつとも、確かに「ももしき」の読み癖については、遠藤氏の指摘するような権威や、流派意識が伴うことは、近世の二条家流などに確認できる。一方で、(12)(13)にみたように、その具体的な受容の姿は複雑な様相をみせている点には注意が必要であろう。読み癖の選択について、それがどのような意味を持って行われたかは、時代性や位相差も関わる要素であり、再考の余地があるように思う。

また、そもそも「モモシギ」が読み癖として許容されたのは、基本的には慣習的なものと考えるが、言語的な背景も想定できよう。「モモシキ」と「モモシギ」の差は「キ」の清濁のみである。日本語の清濁は、その有無によって意味の差が生じる(カ(蚊)・ガ(蛾))ものがあるが、他の音素対立よりもパラレルな対立とされる。この点は、清濁が連濁や意味的差異(サラサラ・ザラザラ)といった機能的な対をなすことから意識されやすい。「モモシキ」と「モモシギ」については、語構成意識が失われた段階でそのような機能差を持たず、当然意味の差異もみいだせない。しかし、古い時代においては、しばしばこのような清濁の差についても無頓着である例がみられる<sup>(16)</sup>。そのような点などから、かつての清濁の差はプロソディに近い性質をもっていたとする立場がある<sup>(17)</sup>。このような清濁に対する想定は、それ自体に更に検討が必要

であるが、古い時代の清濁がこのようなものであったのであれば、「モモシギ」が「百官の座を敷く」という意識のもとにあっても、「モモシキ」の異形として許容されたことも、語の分析意識を妨げないものであったとして理解しやすい。

また、このような文脈からすれば、後の『以敬齋開書』でその矛盾を付き、『早苗草』で形に適した語源説を与えていた点を、今日的な清濁への変化と読み取ることができ、「モモシキ」が優勢となることへの説明もしやすい。しかし、「モモシキ」優勢の背景ということであれば、二条家流(地下流)の影響力といった社会的な側面を一義として捉えるべき所で、この例のみから判断はできない。

資料や他の事例との関連が十分に示せず、考察としては不十分な点が残る。それらは全て今後の課題とする。しかし「モモシキ」・「モモシギ」の歴史には、清濁のゆれが様々な諸要件と関連している様が窺え、この語は非常に示唆的な事例として位置付けられよう。

注

- (1) 橋本進吉(一九三六)
- (2) 秋永一枝(一九九一)
- (3) ■は虫損により不明
- (4) 位藤邦生(一九九五)
- (5) とはいえ、すべての辞書類でこのような態度をとるものもなく、古本節用集のうちにも濁点のない表記であらわれるものも

少なくない。また、キリシタン版漢字字書『落葉集』などでは「モモシキ」をとる。

百敷(ももしき)

『落葉集』「色葉字集」(二二丁裏)

同字書は日本字を用いたものであるが、濁音(半濁音)については、ほぼ網羅的に示されるから、やはり清音形も併存していたとみるのが妥当である。

(6) 中世後期の用例である引用(5)には、「ももしき」を「ももししき」とする語源意識の存在が窺えたものの、同様の意識を具体的に示す語源説は近世期になるまで確認できない。このような言説が行われていなかったとは限らないが、少なくともこの時期には(9)(10)にみたような「百官の座を敷く」式の語源説が広く流布していたとみるべきだろう。

その状況を概観する目的から、特定の語に対する語源説を類従・分類した『日本語源大辞典』より、「ももしき」の語源説の分類・出典を次の通り示す(読み仮名は省略した)。

- ①百官の座を敷くところから(古今集註・河海抄・名語記・貞丈雑記・年々随筆・一挙博覧)。
- ②崇神天皇の長い治世を祝つて、そのシキノミヅガキ(磯城瑞籬)宮に因み、百敷城といったところからか(万葉代匠記・万葉集類林)。
- ③百の寮をシキススル(敷奏)の義(和訓栞)。
- ④モモは百の義。シキは石城で、石を繞らし一定の地を限る意(読史百話〓喜田貞吉)。
- ⑤大宮を建てるに地を広く敷く意(安斎随筆)。
- ⑥モモはタモチカゾフル意。シキはシキツラヌルの意(皇

国辞解)。

これらは、語への分析の仕方によつて①③⑤⑥(「ももしき」)と、②④(「ももししき」)の二種にまとめられる。②の説の出典である『万葉代匠記』『万葉集類林』は、いずれも近世の国学者による『万葉集』の注釈である。④は近代のものである。

(7) 同書には異本が複数あるが、ここの引用は宮内庁書陵部蔵本(請求記号 $\text{S}_{10021}$ )を用いる。確認した諸本のうち、引用箇所については、いずれも大きく変わることはないため、選択は恣意による。ただし、同蔵本(請求記号 $\text{S}_{10020}$ )は示す内容はほぼ同様であるものの、文言が異なる。

百敷<sup>ヲ</sup>道遥院はきの字濁れり。称名院はすみてよまれり。道遥院は惣別濁かちによまれたり。称名院は大方すみかちによまれたりとなり。

同本は、他本と比較し、引用歌の省略など、全体に簡略化の傾向が見受けられる。この記述は本来的ではないと判断し、本稿ではこれを採用しない。

(8) 三条西家における百人一首講釈については、吉海直人(一九九二・九九)で「胡散臭さが常に付きまといっている」とする認識が示される。これに従うのであれば、引用(12)(13)を中心に論を進めることは躊躇われる。ただし、このような態度が「ももしき」に対する受容のあり方として、当時特殊であったとも限らない。いづれにせよ、「ももしき」の清濁を問題として扱う上で、三条西家のような清濁の扱いが存在したこと自体は、この語の受容の一端として注目してもよいだろう。

(9) 引用に用いた李花亭文庫本はこの箇所を「舗」とする。この表記は他資料にもみられるが、異本である国会図書館本・天理大

- 学本には「敷」とあることから、「敷」に訂する。
- (10) 田島智子 (一九九六・五)
- (11) たとえば十三番歌なども同様である (傍線は筆者による)。  
つくは (左・スムナリ) ねの峰よりおつるみなの川恋ぞつも  
りて湖となりける  
後撰恋三。つりととの、みこにつかはしける云々。
- (中略)
- 龍吟秘抄云。(中略) つくばねと濁るべし。名所なり。清めは名所にならぬよし御説なり。
- (12) 契沖は、『万葉代匠記』「物釋枕詞 下」で、表記上の内部徴証及びその用例が百官制度以前からあることを根拠に、「百官の座を敷く」式の語源説に疑問を提示し、崇神天皇遷都の磯城瑞籬宮を語源とみる。
- (13) 田島 (一九九六・一三三)
- (14) 田中宗作 (一九六六・三四一―三四三)
- (15) なお、本稿では歌学資料を中心に扱ったためこのように結論付けたが、岩波古典文学大系「謡曲集」付録の「読み癖一覧」を参照すると、現行 (刊行当時) の謡曲において観世流が「モモシキ」を、宝生流・金春流・喜多流が「モモシギ」をそれぞれ用いるとする。謡曲における読み癖の内実については本稿の範囲では扱いきれないため、この点は保留としたい。
- (16) 例えば木田章義 (一九七八) では、中世初期頃、神楽歌において清音で読まれた「しき」が「鳴(しき)」と認識される例などをあげる。
- (17) 亀井孝 (一九七〇)、小松英雄 (一九七一)、木田章義 (一九七八)、遠藤 (二〇〇〇) など

引用・参考文献

- 赤瀬知子 (一九九五) 「解題」有吉保ら編『百人一首注釈書叢刊二百人一首頼常聞書 百人一首経厚抄 百人一首聞書 (天理本・京大本)』和泉書院
- 位藤邦生 (一九九五) 「解題」有吉保ら編『百人一首注釈書叢刊二百人一首頼常聞書 百人一首経厚抄 百人一首聞書 (天理本・京大本)』和泉書院
- 秋永一枝 (一九七二) 「古今和歌集声点本の研究 資料編」校倉書房
- (一九七四) 「古今和歌集声点本の研究 索引編」校倉書房
- (一九八〇) 「古今和歌集声点本の研究 研究編 上」校倉書房
- (一九九二) 「古今和歌集声点本の研究 研究編 下」校倉書房
- 岩淵悦太郎 (一九三六) 「古言の清濁につきて」藤村博士功績記念会編『国文学と日本精神』至文堂 (『国語史論集』(筑摩書房 一九七七) による)
- 遠藤邦基 (一九八二) 「古今訓点抄」の濁音―「読み癖」の解釈を通して」奈良女子大学文学部研究年報 二五号 (『国語表現と音韻現象』(新典社 一九八九) による)
- (二〇〇〇) 「清濁の読癖―濁音専用仮名字体の存在しないこととの関係から」『文学史研究』四〇 (『読み癖注記の国語史研究』(清文堂 二〇〇二) による)
- 亀井孝 (一九四七) 「ソクソクソクソク―Excursus: 『美那曾久入』について」『国語と国文学』二四―七 (『亀井孝論文集』四 (吉川弘文館 一九八五) による)
- (一九七〇) 「かなはなぜ濁音専用の字体をもたなかった

か——をめぐってかたる』『人文科学研究』12 (亀井孝『亀井孝論文集』吉川弘文館による)

木田章義 (一九七八) 『濁音史摘要』『論集 日本文学・日本語』1 角川書店

小松英雄 (一九七二) 『日本声調史論考』風間書房

澤瀉久孝 (一九五七) 『万葉集注釈』巻一 中央公論社

田中宗作 (一九六六) 『百人一首古注釈の研究』桜楓社

田島智子 (一九九六) 『解題』島津忠夫・田島智子編『百人一首注釈書叢刊』一 龍吟明抄抄』和泉書院

橋本進吉 (一九三六) 『解題』『古今訓点抄』古典保存会

吉直人 (一九九二) 『百人一首の注釈史』『國文学』三七—

———— (二〇〇二) 『百人一首』百番順徳院歌の『百敷』について

て』『解釈』四七—一、一一

引用・参考辞書類

『時代別国語大辞典 室町時代編』(三省堂 一九六七—二〇〇二)

『日本国語大辞典 第二版(小学館 二〇〇〇—〇二)

『角川古語大辞典』(角川書店 一九八二—一九九)

『時代別国語大辞典 上代編』(三省堂 一九六七)

前田富祺監修『日本語語源大辞典』(小学館 二〇〇五)

『読み癖一覧』横道万里雄・表章校注『謡曲集』下(岩波古典文学

大系 一九六三)

参考・引用資料

〈古今和歌集声点本〉※検索には秋永一枝(一九七二)及び(一九

七四)を利用した

古今訓点抄・橋本進吉解題『古今訓点抄』(古典保存会 一九三六)

による

京大本古今秘註抄(中院文庫蔵)・同大学「京都大学貴重資料デジ

タルアーカイブ」による <https://mda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00007176> (請求記号: 中院/VI/61)

古今私秘抄: 国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」

による <https://kotensekinijiac.jp/biblio/200022521/viewer/1> (請

求記号: 99-203)

〈その他歌学関係資料〉

百人一首経厚抄: 有吉保ら編『百人一首注釈書叢刊』二 百人一首経

常聞書 百人一首経厚抄 百人一首聞書(天理本・京大本) (和泉

書院 一九九五)

後水之尾院詠歌大概聞書

宮内庁書陵部蔵: 国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベ

ス」による <https://kotensekinijiac.jp/biblio/100197960/viewer/1>

(請求記号: 20-641-1)

同(脚注七参照): 国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベ

ス」による <https://kotensekinijiac.jp/biblio/100197947/viewer/1>

(請求記号: 20-640-2)

京都大学中院文庫本百人一首聞書: 有吉保ら編『百人一首注釈書叢

刊』二 百人一首経常聞書 百人一首経厚抄 百人一首聞書(天理

本・京大本) (和泉書院 一九九五) 及び同大学「京都大学貴重

資料デジタルアーカイブ」による <https://mda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00007132> (請求記号: 中院/VI/137)

耳底記: 佐々木信綱編『日本歌学体系第六卷』(風間書房 一九五六)

百人一首講談密註(国文学研究資料館蔵本)・同資料館「新日本古

典籍総合データベース」による <https://kotensekinijiac.jp/biblio/200012621/viewer/1> (請求記号: 十2-482-1-3)

200012621/viewer/1 (請求記号: 十2-482-1-3)

による

以敬齋聞書

李花亭文庫本：同文庫のマイクロフィルム複写による（請求記号 325-41-4）

国会図書館本：同図書館のマイクロフィルム複写による（請求記号 号：16-188）

天理大学本：同図書館のマイクロフィルム複写による（請求記号：H911-2/687）

百人一首師説抄：泉紀子・乾安代編『百人一首注釈書叢刊五 百人一首師説抄』（和泉書院 一九九三）

龍吟明訣抄：島津忠夫・田島智子編『百人一首注釈書叢刊十一 龍吟明訣抄』（和泉書院 一九九六）

万葉代匠記（精撰本）：久松潜一ら校訂『契沖全集』巻一（岩波書店 一九七三）

百人一首像讚抄  
延宝六（一六七八）年刊本（国文学研究資料館蔵）：同館「新日本古典籍総合データベース」による <https://kotensekinijiac.jp/biblio/200007761/viewer/1>（請求記号：タ2-211）

天和三（一六八三）年刊本（祐徳稲荷神社 中川文庫）：国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」による <https://kotensekinijiac.jp/biblio/100154398/viewer/1>（請求記号：ナ1-55-7 C12248）

元禄五（一六九二）年刊本（西尾市 岩瀬文庫蔵）：国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」による <https://kotensekinijiac.jp/biblio/100067480/viewer/1>（請求記号：214-114-4 C8890）

（キリシタン資料）

日葡辞書（Oxford 大学 Bodleian Library 蔵本）：『日葡辞書』（勉誠

社 一九七三）

落葉集（イエズス会本部文書館蔵本）：小島幸枝編『耶蘇会板「落葉集」総索引』（笠間索引叢刊 一九七八）

〈近世以前の辞書類〉  
古本節用集

正宗文庫本：『フートルダム清心女子大学 古典叢書別冊一 正文宗文庫本節用集』（同叢書刊行会 一九六八）

文明本：国立国会図書館「国立国会図書館デジタルコレクション」による（登録タイトルは「雑字類書」）<http://dl.ndl.go.jp/infondjip/pid/1286982>（請求記号：WA16-21）

元和三年版下学集：『古辞書叢刊第二 元和三年版 下学集』（新生社 一九六八）

瑤囊鈔（刊本）：浜田敦ら編『塵添瑤囊鈔 瑤囊鈔』（臨川書店 一九六八年）

再版大成正字通：架蔵

（京都精華大学非常勤講師）